

特集

「建築界はこう変わっている」

ここ数年の社会情勢は、成長を続けた日本経済の破綻により、戦後最悪の状況を迎えることとなるだろう。

各企業、自営業とも抜本的な構造改革を余儀なくされ、それこそ明日にでも失職してしまいかねない事態である。

不幸にも政治や経済にいつも簡単に影響を受けてしまう建設業界に従事してしまっている我々に本当に出口はないのか、発想の転換により多少なりとも生き抜いていける抜け道はないのか、可能性を探るべく今回の特集記事といたしました。

『発注者ニーズに合わせ自ら変化する時』

嶋村 浩樹(部20期)

(株)山下設計計画オフィス

わたしの勤める山下設計は、ISO9000取得で大騒ぎである。なぜ大騒ぎかというとISOを取らないと公共工事に参加できなくなるという世の中の流れもあるだろうが、それ以上にいわゆる「組織設計事務所」が潜在的にかかえてきた問題が露見してきたからである。ほかの組織事務所はどうか知らないが、500人を超える設計事務所ともなるといかにも大人数で組織的に作業をこなし、長年に渡る過去のデータとノウハウを持つ総合事務所というイメージがあるかもしれない。しかしそれは大まちがいで、すべてそうとは言わないが多くの場合小人数でなおかつ担当者が複数の設計を同時に行っているため、それぞれの意匠・構造・設備担当者が交錯し入り乱れての作業になる。またデータの整理が悪く情報量はたしかにあるのだがうまく生かしきれていない。プロジェクトの成否はそれぞれの担当者の能力に負うところが大きく、組織的とは言いがたいのが実状である。

言い換えればデパートの地下にテナントで入っている個人経営の魚屋と同じである。客からすれば一つの建物に入っているだけでまとめて見えるが、魚屋のオヤジはどう置いたらいちばん売れるかや、鮮度を保つにはどんな工夫を凝らすかは気になっても、となりの八百屋で売っている野菜がどういう種類でどのくらい売れて、またとなりの肉屋の売肉の値段がどれほどかには、興味が無いのとさして変わりはない。そういう状態でのISOの導入である。

ゼネコン等は一時期流行ったTQCあたりと発想が似ていなくもないので導入に関してさほど大変でもないだろう。また最大手設計事務所であるN建設などはもともと文書管理のしっかりした事務所だし、社風が良くも悪くもISOの発想に合っているため混乱はしないだろう。アトリエ事務所は小人数だろうから仮にルールを決めるにしても決めやすい。ところが個人商店の寄り集まりに近い山下設計の場合、そうはいかない。ISO9000の主題である文書管理方法ひとつ決めるにしても、もともと設計の手順が個人または各グループによってまちまちでそれぞれが自分のやりかたがベストだと思っているので、実は内心ではなんで統一する必要があるのかと皆思っている。そうなると、なんで同じ看板の下で設計をするのかという大前提にぶつかる。はっきり言おう。楽だからである。仕事がそこに集まるからである。人気の少ない山奥で店を開くよりは繁華街にあるデパートの地下のほうが、客が集まるからである。実はそれこそが潜在的な問題点で、組織事務所と呼ばれるものが世の中でどうしたら生き続けていけるかを、ISOを契機に考えざるをえなくなってしまった。

しかしそうした疑問を抱えつつも、存在している業態がある。商社である。かれらはまさに小会社の社長が寄り集まったようなもので、最前線に立つ社員の裁量権は他業種に比べて高い。その仕事の方法もさまざまだが、会社を儲けさせるという目的においてはまとまっている。たとえばそれを組織事務所当てはめてみるとクライアントと最も近い距離にある、プロジェクトマネージャーが対応の裁量権を持ち、組織の顔としてその人たちの顔が自ずと前面に見えてくる、といったところだろうか。もしかしたらそんなところに生き残るためのヒントがあるのかもしれない。デパートだって魚屋のオヤジだって、目まぐるしく変わる消費者の好みに合わせて、生き残りをかけてあの手この手を考える世の中である。山下設計という75年も続く老舗看板の下で、のうのうと胡座をかいている時代でないことだけは確かである。

『常識、システムを見直す好機に』

松浦 一信(部12期)

松浦建築研究所

昨年秋、勤めていた設計事務所を退社し、今年から個人事務所をはじめた。多忙な業務に追われていた日々から開放されて建築の世界を見てみると、私が就職したバブルの頃と比べると社会情勢は一変している。

現在、長引く不況に停滞する日本は、金融ピクパンのみならず行政、産業、教育、すべての分野で新たな改革が求められているが、とりわけ建築界の取り巻く環境は厳しい。建築界は公共工事の減少のみならず、動かない土地取引、銀行の貸し渋りによる投資の沈滞、不況による住宅の買い控え、大手ゼネ

コンの人員整理等々建築業界でいい話は聞こえてこない。

しかし、この不況もまんざら悪くもないのではないか。新たな社会構造に対応するために、いままでの常識やシステムを見直して行くチャンスでもあろう。

ところで一般の目から見ると建築業界にも納得のいかない慣行が多々ある。私が就職してまもなく、ある実施設計を担当する事になった。設計が終了しゼネコン数社から出て来た見積書を比較検討していた時、最初に疑問に思ったのは、出精値引きの項目である。しかも、数百万という金額であった。各項目が1円単位で詳細に見積りされているにも関わらず、合計金額をきれいにまとめるために、としか思えない操作がなされている。これでは何の為に詳細に見積りしたのかわからないし、建設会社の利益はどこに乗っているのかも見えてこない。発注者の立場から見ると、どっかで手抜き工事をして利益を上げるのでないかと疑心暗鬼になるのも無理はない。発注者はディスクロージャーを求めているのである。建設業者は、発注者に対して実際の工事費がいくらかかり、当社は技術料や手数料としていくら儲けさせて欲しい、と正確な情報を提示すべきである。

一方、設計業界にも一般から見ると不思議な慣習がある。一般の人が建物を建てたいと設計事務所に依頼すると、設計事務所は建物の設計はするが、工事はしない。工事は適当な建築会社に頼んで下さい、とこうなる。

一般に物を購入する場合、消費者から見れば窓口はひとつである。仮にドレスを作るのに、デザイナーに絵を描いてもらって、近くの洋服店数社に見積りして作ってもらう人などまずない。設計と施工の関係は、医者と処方箋薬局の關係に似ているかもしれない。

また、設計者の場合、完成後建物に何か不都合が出ても一方的に施工側に責任を押し付けてしまうケースは少なくない。もっとも中小規模の事務所がほとんどで、責任を取れるほど経済能力はない。(建築家賠償責任保険に入りましょう。よって企業は煩雑な発注業務と責任の所在を明確にするため大手ゼネコンに設計施工で発注してしまう。

最近、CM(コンストラクスマネジメント)のコンサルタント会社が注目されているが、前述のような不透明な工事金額やコスト意識の低い設計者に疑問を抱いている発注者が、今後このようなコンサルに依頼するケースが増えるであろう。

本来、CMの業務は建築家の役目であったのだがバブル景気に流されて、いつのまにかコスト意識が気薄になっていったし、建築コストの情報を集める努力を怠ってきた。

このような現状を危惧した日本建築家協会は、今年のはじめに「JIA-CMガイドライン(案)」を発表した。くわしい内容は割愛させて頂くが、CMの業務範囲や業務形態、報酬算定などの検討事項が書かれている。要するに「CM業務はもともと建築家の業務範囲だからよそ者に勝手にシマを荒らされちゃ困る。」という事である。しかし、既に日本建築積算協会ではPM資格を自主認定しているし、建設省が国家資格に取り上げればあつという間に天下りの為の法人が作られ、制度化されてしまうだろう。JIAがんばれ!

こうしてみると建築家の肩身も狭くなったものだが、大規模な工事では多くの利害関係と複雑化している工事の全体を一人の建築家がコントロールしながらデザインしていくのは

無理があるし、分業化していくの合理的であろう。むしろ建築家には新たな仕組み、アイデア等ソフトの提案が求められているのではないだろうか。

『息の長い呼吸する住宅を目指す』

藤川 曜子 (部16期)
遠藤楽建築創作所

私が建築に興味を持ったのは、自由学園の校舎であった。旧校舎は、フランク・ロイド・ライト氏の設計で、その弟子の遠藤新氏が現在の校舎を設計されている。中学生の忙しい毎日の中で、楽しみなのは昼食の時間である。校舎の中央に食堂がある。600人が集まるその建物には、高さ6m程の細長い窓が柱をはさんで7枚連なっている。その窓からは、晴れた日には、雲の動いていく姿や、鳥の群れ、日に日に色濃くなる新緑を見ることができた。私は、食事の後、その窓から空を見て時を忘れる瞬間がとて好きだった。ある日同じように外を眺めていたとき、空間というもの、より以上の広がり、人間に安らぎを与えることを感じ、空間を<生む>、ということに面白さを感じたことが建築に興味を持った最初であったと思う。

現在、遠藤新氏の二男、遠藤楽先生の事務所に入社させて頂き、3年が過ぎた。20年、30年前に設計した方から、「とても楽しんで大切に住んでおります。」というお便りを頂いたり、以前のお客様が紹介して下さいることがとても多く、現在取り組んでいる住宅もその1つである。そのようにして設計の依頼が続いていることをとても素晴らしいと思う。

私自身は、建築という仕事に携わることができ、今まで受けてきた教育 - 文学、歴史、植物学、生物、数学、化学、音楽、風土や自然、掃除や料理、裁縫などに至るまで -、また理科大学で受けた専門教育を含め、無駄であったと感じるものはなかったが、建築というものの必要とする知識と要因の多さに驚いている。

これから、建築家としての必要な知識を身につけ、産業廃棄物などの社会的問題にも目を向けたい。また、私も、20年、30年経っても喜んで頂けるような息の長い呼吸する住宅を目指したいと思う。

最後になったが、これから建築界がどのように変わっていくかは、日本の経済とも結びついた問題であると思う。ただ、バブル崩壊後といわれる今、バブルであった時代の日本が、また、日本人が豊かであったかを考えると決してそうとは言えない。今だからこそ、豊かな住まい、豊かな生活、そして豊かな生き方を考えられる機会ではないかと思っている。

『情報化設計施工に可能性』

星野 恒明 (部28期)
鹿島建設東北支店建築設計部

私が鹿島建設に入社したのは、バブルもはじけきった95年の春でした。そのため、入社当初から経費削減が叫ばれており、むしろ景気よかった頃はどのような状態だったかを知りません。私は建築設計部に在籍しておりますが、入社してから先輩に聞いた話では、バブル絶頂の頃の忙しさといったら本当にすさまじいものだったようで、会社に寝泊まりする生

活が当たり前のようだったということです。幸か不幸かその頃のことを全く知らない私は、寝泊まりした経験はあまりありませんが、残業を大幅にカットする経験ならたくさんあります。あまり大きな声では言えませんが。

ここ数年の市場の冷え込み、公共事業の圧縮、そして今なお残るバブルの後遺症など、建設業界は大きな荒波に飲み込まれたまま抜け出せずにいるように思われます。昨今の激しい受注競争の中で会社の売り上げをいかに確保していくか、同業他社に対していかに優位性をアピールできるかといった時に、施主の目はそのほとんどがコストにむけられます。世の中の景気が好転しない限りは、施主側の予算が厳しいのも当たり前ですが、技術的な問題はおざなりになっている現状があるように感じられます。建物を作る時、いかに経験豊富な企業であるか、社会的に評価の高い企業かどうかは、以前ほど大きな判断基準ではなくなってきたのかもしれませんが。そのため社外にアピールする技術も、まず第一にいかにコストダウンがはかれるか、といったものが多くなります。私が担当している構造設計でいえば、いかに躯体量を減らすことができるか、現場施工を簡略化し短工期化できるか、そしてそれによっていくらく安くなるのか、ということです。しかし、構造の世界はただ安ければいいというものでもなく、当然のことながら安全な建物である必要があります。そのため、鉄筋コンクリートと鉄骨の長所をお互いに生かしたハイブリッド構造や鋼管コンクリート造などのように、耐震性を向上させながら躯体数量を減らすことができる可能性のある技術開発に注目が集まっているといえます。こういった新しい構造技術も初期の開発段階は終わり、それぞれの物件にどううまく適用していくかという実施段階に入っており、すでにいくつもの施工例があります。

また、これから建築基準法は性能設計へと移行していくようですが、建物の使い勝手や安全性、あるいは施工の精度などを項目に入れた、建物の価値評価というものがあるようになっていくものと思われます。このような価値基準が生まれることにより、ただ安く建てられるかどうかではなく、ただ会社名によるだけでなく、そのコストに見合うだけの高品質な建物を提供できるかどうかという、トータルな目を見たコストコントロールが評価されるようになっていくのでしょうか。例えば同じ会社が、クラウンとカローラというまったく質もコストも異なる車を作るように、我々もどのような質のものを求められ、どれだけコストをかけられるのかということに、今まで以上に意識を向けなければならぬといえるかもしれません。

もう一つ面白いトピックスとしては、情報化設計施工というものがあります。これは、他業種に比べればずいぶん遅れた話なのでしょうが、設計図書の情報や、再度手を加えることなく最終的な現場の竣工まで活用していくこととするものです。構造躯体のデータベースを中心に、構造設計図書、構造計算、積算、ファブの工作図、配筋詳細、さらには設備図の落とし込みまで、それら全てをリンクしていくものです。この情報の一元化は、設計図書に今までの線一本一本という情報ではなく、どのような形の鉄骨なのか、どのような配筋なのかという、データベースを持たせることにより可能になったことです。これをうまく活用することにより、各業者がそのつど図面を

描き起こしていた作業を省力化することによるコストダウンが可能であり、また積算や現場の情報を生に設計段階でつむことができるため、それをフィードバックすることによる品質の向上も大きなメリットであると考えられます。

以上、ゼネコン設計部に在籍し、自分の感じる数年の会社の変化について書いてみましたが、あまり夢のある話がなく、コストダウンの話に終始してしまっただけです。やがて景気が持ち直し、大きなプロジェクトに参加できる時もやってくることを願いたいものです。

『建て替え、再開発に積極アプローチを』

山澤 正(部12期)

住宅・都市整備公団

私は現在、住宅・都市整備公団神奈川地域支社再開発・改善部に勤務しています。最近の建築界の動向について、私の勤務先での拙い経験を中心に述べさせていただきます。

私の業務は、昭和30年代に建設された公団住宅の建替事業で、建替対象団地の事業計画全般の企画・立案が主な業務であり、計画当初から入居段階まで担当しています。担当エリアは神奈川県藤沢市、鎌倉市、茅ヶ崎市、平塚市で湘南と言われる地域です。この地域は昭和30年代に旧日本住宅公団(住宅・都市整備公団の前身)により大規模団地が多く建設されました。これらの団地は建設後、約40年が経過し、建物・住宅設備の老朽化が進み、また、住宅規模が小さいため現在の住宅ニーズからかけ離れたものになっています。団地居住者についても高齢化が進み、団地からかつての活気が失われているのが現状です。そこで住宅・都市整備公団では昭和61年度から団地建替事業に着手しました。既に10年以上の経験が蓄積され、現在ようやくノウハウが蓄積されて事業として軌道に乗り出した段階です。

少し仕事の紹介が長くなりましたが、公団事業が建替事業にシフトしていく中でこれまでの団地建設とは異なった経験を持つに至りました。その点について触れることにより私なりの最近の建築界の動向としたいと思います。

第一に建替事業は、これまでの団地建設のように更地に住宅を建設する事業と根本的に異なり、建設現場には既に生活している人々が存在するということです。これは生活している人々と共に新しい住宅作りを考える必要が生じることになります。我々建築屋は住宅をハードの専門家として作ることに慣れていますソフトも含めて住宅を作ることになると様々な要素が必要になり未経験な事態に遭遇することもしばしばです。例えば、工事エリアを決定するためにも建設工事の施工のしやすさより、建設中に近接して生活する人々の安全対策や良好な環境維持ということにポイントを変えることになりました。

今後、公団の建替事業に限らず、都心部の再開発が本格的に実施されることになれば、建築界に従事する人々の多くがこのような経験を持つようになるでしょう。

第二に建替事業は既成市街地の中での事業だということです。これまで公団事業を始め、住宅建設と言えば、既成市街地の中より郊外部で宅地造成から行うのが一般的でした。現在、既成市街地に取り込まれている公団の団地、民間分譲地の多

くが開発前は田園、畑、丘陵地であり、郊外と言われていた場所です。かつて、このような郊外部で住宅建設する場合、道路、下水道などの基盤整備からスタートし、学校、保育園、公園、商店、医療施設、市役所出張所、銀行などあらゆる生活基盤施設の整備が伴いました。このような住宅建設は、非常に大規模（建設戸数1,000戸以上の団地も一般的でした）であり、また、長期的展望により計画され実行されたものでした。一方、当時は高度経済成長下という時代的背景もあり、大規模と言われた住宅団地でさえ、僅か2,3年で建設されました。

現在、これらの住宅団地を建替により再整備するためには、1,000戸程度の団地で約10年を要します。これは団地に居住者がいるということは勿論ですが、他に周辺団地にも人々が生活しているため、それらの人々との利害調整に非常に時間を要するためです。

何故、こんなに時間やコストがかかるのに建替事業を実施するのかと言えば、四大都市圏においては通勤時間等の制約によりこれ以上の都市圏域の拡大が困難であるため、既存の古い住宅団地建替（特に東京都心部の住宅団地建替）により新しい居住環境を作り出さざるを得ないためです。

以上、公団の建替事業における経験を通じての話が中心となりましたが、これから建築界に携わる人々は、様々な分野で建て替えや再開発という問題に遭遇すると思います。建て替えや再開発は予想以上にコストと時間がかかります。そしてこれまで街づくりと言えば、建築屋か土木屋の仕事が大半でしたが、これからは様々な分野の人々の協力が必要になると思います。現在、新聞やテレビで取り上げられている都心部の再開発の問題は、元を正せばバブル経済期の土地投機で地上げされ、バブル崩壊後様々な経済的理由により活用方法を見出せない未利用地の問題から端を発しています。

これからの建築界はこれまで以上に社会や経済との接点が増え、我々建築を学んだ者はより幅広く社会の課題に積極的にアプローチしていく必要があると思います。

『本物しか残らない時代ヘシフト』

諸岡 伸幸(部10期)
諸岡建築(有)

今回のテーマでは、私は地場零細工務店の業界に入るため、役不足ですが、私見を述べます。このテーマを『変化』として考えると、建築界だけでなく、日本全体にもいえる事で、『近代化の終わり』と言う時代の区切がある。この近代化は『国民が丸となり、一つの目標に向かう時代』と考えてください。その時代は多少の不備不足があっても、目標の為には隠された時代であった。その近代化で創り出された正負の資産を基礎として、成熟化の時代への変化を始めたと思います。その変化期では、いままでのゲームのルールが変わり始めているのに、ルールが変化した事に気づかないのか、気づかないふりをしている、今までのゲームでの勝利者と、自己否定、自己変革、自助努力によって新しいルールを習得し、再度勝利者に返咲く者の二極化があると思います。それは、農耕民族の村社会で長老の老害でいるいか、狩猟民族の仲間に入り実力を評価されるかの選択。しかし、すべて村社会の慣習や慣例が悪い訳ではないが、あまりにも自分の村にばかりに水を引きすぎた

事、その事が当然である事が問題であると思います。ただ、その村で日本人の一角が生活をしていて、他の村から出された者を受け入れてきたと言う良い面もあります。前置きが長いですがこれらのことは、地場零細工務店界でも同じです。仕事としての建築なのだから奇麗事ではやっていけないが、これは原理原則を踏まえ、本質を捉え、本物しか残らない、残った者が本物である時代へと変わって行く、過渡期であると感じます。そこでは主義主張を明確にし、利益の前に、理念や信念を考えての仕事があるのだと確信します。『変わっている』というより、まだ『変わらなければ』という状態だと思います。既存の概念や組織などが時代の変化により老朽化している現在ですが、物造りの原理原則は変わらない。それを取巻く環境が変化しているのだと実感しています。まず原点、『よい建築とは』の課題から再出発だと考えます。

『町場の大工の今後に不安』

中川 信洸(部13期)
(有)中川工務店

このところの不況時ばかりでなく、数年大工職やそれに伴う下職関係に若い人々がほとんどいないのである。若いと言うと30代半ばから40代なのである。

たとえ若い人がいても、それは決して見習いではなく、臨時のアルバイト的な人々が多く、いわゆる『小僧』ではない。

今の世の中ではなかなか下積みから手に職をつけると言うことをさせているようだ。大工と言うと何年で一人前とか言うが、それは、その人が付いた親方の力量一つであろう。

現在の仕事内容を見ると様々な所が機械化されていて、今は昔ほどそれほど汚れもしないし、重労働ではあまりないはずである。まあ、場合によりますが、けれども、実際建築会社に見習(大工)として、入社しても、その会社の事情等により十分仕事を教えられない場合も多々あり、それに、他の職人のしている仕事をじっくりと盗み見るなどと言うことも出来ないようだ。

この先、町場の大工たちはどうなってしまうのか、私には見当がつかない。しかし、今言えることは、年をお召しになった方々が非常に元気なのである。今の時期に、早く技術を習得しなければならぬことは、間違いないことではないか。

大工だけではない。それに関連する下職もそうであろう。

最近、材木屋、銘木屋、畳屋、建具屋、表具屋、など、後継者がいなく、廃業するものが非常に多いのである。これらの職種で、今残っているものは一種類のものをあつかっていないのが現状である。

そして、廃業するものは、息子等が後継しない、しかし、彼らは、なぜか、建築関係の仕事についているのが多いような気がする。

そして、又、親たちは子供たちに、自分の仕事は誇りを持っているが、強制的に後を継いでほしいとは、今の時代ではなかなか言えないようである。

『仕事があるうちが花』のようである。

平城宮朱雀門復元への道

内田 昭人
奈良国立文化財研究所

平成10年4月、平城宮朱雀門が復元されて竣工式を迎え、その雄姿を甦らせた。本稿では朱雀門復元に至った経過について概要を記すことにしたい。

今からおよそ1300年前、飛鳥に近い藤原京から、奈良盆地の北部、平城京に都が移された。平城京の入口である羅城門をくぐると、75mもの幅をもつ朱雀大路がまっすぐ北に向かってのびていた。そして、その



4 Km程先には平城宮の正門である朱雀門が建っていた。朱雀門の前では外国使節の送迎を行ったり、時には大勢の人たちが集まって歌垣なども行われた。正月には天皇がこの門まで出向き、新年を祝う朝賀の儀式も行われるなど、この門を舞台にしての歴史の刻みには大きく深いものがある。朱雀門の両側には高さ6mの築地がめぐり、130haの広大な宮城を取り囲んでいた。しかし、この都も784年には長岡京へと移り、悠かな時が流れ、その跡はすべて土の中に埋もれていった。

朱雀門復元の研究は、昭和39年に同跡地に発掘調査の光があてられ、翌年に門の10分の1の模型を製作したところから始まる。昭和53年には、平城宮跡の長期展望を踏まえた「特別史跡平城宮跡整備基本構想」が文化庁により策定され、以後の平城宮跡整備の基本的な指針となる。これには建物復元地域としての朱雀門など4ヶ所があげられている。その後、同54年度から材料と工法に関する研究を7年間にわたり続けたのち、同61年度からは3年連続で「平城宮朱雀門の意匠と構造に関する研究」を行った。平成2年に朱雀門跡の再発掘を行い、さらに新しい知見を得て、平成4年に朱雀門基壇の復元工事を完了する。平成5年、朱雀門復元のための予算がつき、本体復元工事を開始。この年には主に仮設工事、木材の購入を行う。翌平成6年12月に立柱、平成9年2月に上等の運びとなった。

朱雀門に関する直接的な資料は、発掘調査によって明らかとなった知見による。入念な堀込地業による基壇の基礎工事の状況から、まさにこの場所が朱雀門跡であることがわかる。また、柱位置からは平面規模がわかる。門の大きさは正面が5間(25m)側面が2間(10m)であった。根石と礎石の存在から、柱は礎石で支えられていたこともわかる。さらに遺構上面や周辺から多量の瓦が出土していることから、瓦葺きであったことも立証された。これらの事実をたよりに、現存する古代建築や文献史料を参考にし、さらに今日までの建築史研究の成果や、明治以来百年の蓄積をもつ文化財建造物修復で得た知見などをもとに、想定を加えながら復元研究がなされてきた。また、朱雀門では上部の建物がどのような構造形式であったかについて知る直接的な資料はない。今回の復元では、「伴大納言絵詞」に描かれている平安宮朱雀門が二重門であることなどから二重門と設定した。また、その基本構造を、古代において唯一の遺構である法隆寺中門に倣っている。朱雀門は奈良時代前期の建築であり、その年代が法隆寺よりくだることから、様式については同

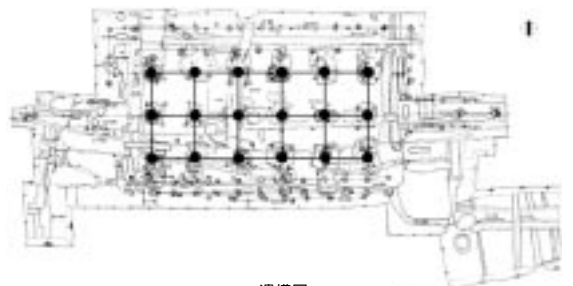


年代の薬師寺東塔を参考にした。そして、朱雀門の規模が大きいために、各部材の大きさや比例関係などはより近い条件をもつ東大寺転害門を参考としている。部材の納まりや装飾金物など、細部の参考資料については次号の「復元朱雀門の施工」を参照されたい。

上記のような考察を踏まえた復元案は、もとより奈良時代の建築としての特有の構造的な脆弱さをもっており「建築法規上の安全性」も確認されているわけではない。蓄積された伝統的な技術による建築であっても、現代の構造力学による解析結果に照らせば、力の伝達の不備や構造体としての耐力の不足も指摘される。ここに現代に建てる新築建物として扱われ、とくに耐震的な安全性の確保が問題となり、内部補強が必要となった。この検討については、次号の「復元朱雀門の構造」を参照されたい。

さて、復元図がまとまり、予算的措置がとられても、復元工事ではまた別の問題が発生する。今回のように遺跡の直上での建物建設では発掘された遺構の保護が最優先となる。あくまでも奈良時代の遺構を損傷したり破壊することのない基礎工法が求められる。地中杭を打ったり、基礎用の掘削は許されない、このことから、実施では、遺構面を築土で保護した上、基壇の立上りの中でSRCの箱を造りベタ基礎とし、上部構造と基礎の重量による力が、遺構面上の地耐力以下に以下に分散されるように設計・施工を行って遺構面の保護をはかった。

遺跡の建物復元では建築史学分野や大規模木造建築の構造面を進展させるだけでなく、木造伝統技術の継承にも還元される。さらに、多くの人々が遺跡を理解する一助ともなろうし、ひいては我が国の歴史についての興味を深める機縁となることを期待したい。



遺構図

from Freshers

私の4月 - 新人日誌より -

鍋島 康子(部31期)
竹中工務店東京本店設計部

社会人となって早くも一ヶ月が過ぎました。長い様でもあり、あっという間だったような、無我夢中な一ヶ月でした。一番懸念であった人間関係も、明るく面白い先輩達に恵まれ、すっかりグループの雰囲気に馴染み楽しい日々を送っています。(私の所属するグループは特殊な人が集まっているというウワサもあり)新人は3ヶ月間日誌を書くことになっており、ここでその一部を恥ずかしながら紹介させていただきます。新人のオタオタバりを笑ってやって下さい。

4月 日雨のちくもり

8時半入社。今日から設計部に配属となる。指導担当をして下さるHさんが研修会場まで迎えに来て下さる。11時まで設計部の集会。Hさんに設計部内部を案内して頂く。人の名前・顔・所属等をほとんど覚えられず。これから少しずつ覚えて行きたい。

4月×日くもり

午前中はOA研修。午後は私が担当することになった、某デパートのトイレ改修工事について考える。その他雑用。早く一人前(せめて半人前か)に仕事が出来るようになりたいなあ。

4月 日くもり

映画館の資料作り。図面リスト作成等。

あっという間に一週間が終わった。今日はグループ結成会。座敷の入口に「竹中工務店設計部T様」と書かれた紙が張り出されてあるのを見て、社会人になったのだなあと思った。二次会まで参加。

4月 日くもり時々雨

映画館の資料作りがやっと終わる。思ったより時間がかった。とても小さいものながら、まずは一仕事終わって嬉しい。

4月 日くもり時々雨

FAXを外部に送るが未通信。0発信する必要があることに気づいたのは、4回送信後だった。新人らしいミスで情けない。

4月 日雨のちくもり

一日トイレのエスキス。こんなに熱心にトイレについて考えたのは初めてだ。まだ学校の課題をやっている気分が抜けない。担当のYさんに「実施なんだよ」と言われる。電話を受けるが、聞き取れない社名あり。難しい名前はやめてほしい。

4月×日くもりのち晴れ

トイレの床材として石を考えており、ショールームに行ってサンプルをもらう。初めて社外の人に仕事として会い、名刺を渡し感慨無量。会社に入れば、社員一人一人が会社の顔になるのを実感した。トイレのプレゼンについてYさんとHさんからアドバイスを頂く。いかに施主の心を掴むかが大切だ。

4月 日くもりのち雨のちくもり

MiniCADをインストールすることが出来たので、トイレの図面をCADで書こうと思ったのが間違いだった。予定を大き

く下回り平面図さえも完成できずに一日が終わる。自分の能力を的確に捉えることが必要だ...(T-T)

4月 日晴れ暑い

私の隣に座るH.H.さんの格言。「人に厳しく自分にやさしく」「人生冒険だよ!!」帰りは終電だった。

4月 日晴れ

午前中いっぱい何とかが資料作成。午後1時半よりデパート事務所にて営繕課の方とトイレ改修の打ち合わせ。導入説明を上司のYさんが行い、提案説明を私が行う。途中でYさんが補足説明をして下さり大いに助かる。相手にアピールするためには話術も大切だと思った。とりあえず竹中で設計・施工を任せて頂くことになり、一安心(^-^)

4月 日雨

いつもより1本早い電車に乗ったので、初めてH.Y.さんに勝ちグループで一番入社。初めて保険のおばちゃんの勧誘を受ける。保険は入るべきかとHさんに聞けば、稼ぎのいいダンナを捕まえればいいとのアドヴァイス。なるへそ。

4月 日くもり

気持ちはすでにGWに向かっているのだが、見積りのための図面作成を今日中に完成させる必要があり、必死。素材に関する知識の無さを痛感。ケイテツって何?PBって何??大学の授業をもっとまじめに聞いておけばよかった。何とか9時すぎに宅急便で作業所に送る。お陰で女子同期会に15分しか出られなかった(T-T)とにかく明日から7連休!!休み明け会社に来られるだろうか?!*****

こんな風に毎日があわただしく過ぎていきますが、設計という仕事に携わることができて幸せです。これからも楽しく社会人生活を満喫していきたいと思います。

「杉の子会」開催される

大越 直子(部27期)

積水化学工業(株)住宅総合研究所

さる2月21日(土)に、杉山研究室(工学部2部建築学科)のOB会「杉の子会」が、飯田橋の「東京パティ食堂」において開催されました。会は杉山英男先生を中心に、河合直人元助手(現・建設省建築研究所)をはじめ、研究室の卒業生23名が出席し、和やかに行われました。

杉山先生は、95年に定年退職されましたが、OB会は92年12



月に河合助手が理科大から建築研究所に移られる析、送別会として卒業生が集まったのを第一回として、その後定期的に年一回行われるようになり、今回は7回目を迎えました。

第二回のOB会の時には、この会の名称がほしいという声があがり、全会員から名前を募集し、その中から出席者の投票により、「杉の子会」と名付けられました。この名前は覚えやすく呼びやすいということもあり、その後OBの皆様にも大変気に入っていただいています。

会では、研究室での楽しい思い出、先生に怒られた苦い思い出など、先生を中心に楽しく学生時代の思い出話をしたり、また建築業界に勤めている人が多いので仕事の面での交流をもったりと、楽しく有意義なひとときを過ごしています。なによりもすばらしいのは、学年を越えて多くの先輩後輩と知り合えることだと思います。

ただし、ひとつ残念なことは毎年出席者が決まってきたまわっているということです。会員の皆さんには同期同士で声をかけあうなどして、是非多数ご出席くださいますようお願いいたします。では、次回の杉の子会でお会いできるのを楽しみにしています。

「平成10年度 懇親会・新会員歓迎会」の報告 佐野吉彦(部14期)

3月18日、築理会主催の懇親会が開催された。3月の開催はここ数年恒例となっているのだが、OB間の懇親の場だけではなく、在学生の卒業祝いも兼ねた会となっている。当日は築理会会員34名と在学生15名の参加に加え、平野・鈴木・寺本・真鍋の4教授にもご出席いただくことができた。山口秀之氏(部24期)の司会により会は和やかに進められた。途中で先生方や卒業生からスピーチを交えながらの2時間であった。(*)そのほかこの場を借りて、各委員会からこの1年の事業の報告や今後の事業の予告もおこなわれた。2月に就任したばかりの築理会の新幹事も会の設営に奮闘していたが、そのこともあって出席者の顔ぶれにも広がりが出たようだ。学生も、卒業生だけでなく就職活動に入る学年も顔を見せていた。築理会報の新年号では、昨年秋のOBと学生の交流の場「いま建設業界は—建築学科OBに聞く」の事業報告が掲載されているが、こうした交流の機会が進路決定に役に立つものであるという認識が浸透してきたように思う。とはいっても、会は手放しの成功とは言えないかもしれない。理由の一つは参加人数の少なさ。ずいぶん手分けして学内外に声をかけての上でのこの人数である。年度末の平日の夜という条件が今後も良いかどうかは築理会員の意見を待ちたい。二つ目は必ずしもお互いが十分な交流ができなかったのではないかということである。この会場ではどうしても時間制限と音響条件の問題が残る。できれば折角の機会を、いろいろな情報交換の場となるよう考えてゆきたいものだ。なお、この会は事業委員会の担当事業であった。前号の河合・事業委員長(部8期)の報告の通り、年間を通じて現場見学会や研究セミナーなどの多くの事業を担当してきている。これらの機会はOBと大学との密

接な関係を形づくるために重要である。ぜひ多くの参加を期待したいし、また見学できる現場や興味深い技術テーマをお持ちの方の積極的な情報提供をお願いしたい。

*なお、スピーチされたかたは、八木会長・坂下副会長・大岩事務局長のほか、佐々木昌克氏(部4期)、八巻氏(平野研M2)、橋場氏(鈴木研M1)そして平野・鈴木・寺本の3先生。

会員の活躍

最近のコンペ入賞者を報告します。研究室等に聞いて把握できた範囲なので、もし漏れている方がいましたらごめんなさい。ぜひご一報下さい。次回には必ず掲載します。また随時、このような会員の活躍を報告をしたいと考えておりますので、入賞等しましたら築理会事務局までぜひご一報ください。(部22期、小泉隆)

* 順不同。コンペ別。

- 1) 国際コンペ「21世紀・京都の未来」
佳作:野田正治(部5期、本学非常勤講師、ナウ環境計画研究所)
「ハイブリッド・パークシティ(パネル・論文併用)」
- 2) JTEPCO快適住宅コンテスト(東京電力)
優秀賞:石橋利彦(部5期、石橋徳川建築設計所)
「東向島のホットスラブ」
- 3) JTEPCO快適住宅コンテスト(東京電力)
佳作:海野建三(部9期、海建築家工房)
「高蓄熱URCハウス1」
- 4) JIA第7回東京都学生卒業設計コンクール'98
審査委員長:伊東豊雄
銅賞:松川昌平(部33期、鈴木研)
題名「Landscape housing」

会費・口座自動振込みは来年度より実施

会費の口座・自動振込みは来年度より実施することになりました。PR不足もあったと思われますがご協力いただいたのは予想よりも数が少なく、残念ながら今年は導入を断念することになりました。なお、送って頂いた口座自動振込みの用紙、又、まだお持ちの口座振込みの用紙は引き続き有効ですのでご協力よろしく願います。お送りいただければ来年度まで預らせていただきます。すでにお送り頂いた会員の方々には、なにかとお手数がかかることとなり申し訳ございませんでした。なお自動振込みの3枚綴りの用紙は一枚だけ控えとして外していただき、あとの2枚は築理会に送っていただきますようお願いいたします。築理会

インフォメーション

98年度 第1回「築理会 研究セミナー」
 6/27(土) 17:00~19:00
 真鍋 恒博先生 「ライフサイクル性能評価」
 理窓会館会議室にて
 (03-3260-0725 飯田橋駅より徒歩5分)
 参加費:一般:2000円 同窓会員:1000円
 学 生:無料(受付は当日会場で)
 問合せ:東京理科大学・小泉まで
 03-3260-4271 内3482

築理会 現場見学会のお知らせ
 6/27(土) 14:00~16:00
 名 称:アクアフォレスト稲毛
 所在地:千葉市稲毛区小仲台7
 事業主・売主:総合地所
 設計・施工:長谷工コーポレーション
 構造・規模:SRC14階488戸(共同住宅)+共用棟
 敷地面積:20,339.35m²
 建築面積:5,452.59m²
 延床面積:42,983.71m²
 設計コンセプト:丘の上の楽園生活
 工事進捗予定('98.6末):躯体工事5~6F,
 設備工事2F,内装工事1F

特 徴:

- 構造 - 柱と梁の仕口部にサックス金物を使用
 床は小梁なしのアンボンドスラブ(PC鋼線入)を採用
- 設備 - 給水にポリブデン配管とサヤ管ヘッダーを採用
 浴室換気乾燥機
- 意匠 - 1,2階はフラットフロア
 一部住戸に2重サッシを採用

(参加ご希望の方は右のデータ確認カードの通信欄に印を付け、築理会事務局までFAXでお送り下さい。後日、案内をお送りします。)

編集後記

決して明るくない時代に暗い特集記事で、多少、恐縮していますが、私は大阪の風土、大阪人の気質が意外にこの不況を乗り越えるポイントなのではないか・・・と最近思います。とにかく何でもやってみる、オリンピックも呼んでみる、再開発も、デパートに貫通する観覧車もとにかくやってみる。なにか長期的な展望に基いた計画実施なのか、伺えるものは何もないのですが、大震災から立ち上がった自信のようなものも感じられます。

来年は、都及び大阪府知事選です。ともに最悪の財政状態の中で、皆さんのところの知事は、意地悪婆さんかタコのどちらがいいですか。(伊谷峰)

築理会報98新年号
 98年5月発行 Vol.22

編集長 : 伊谷峰
 編集委員: 森清、伊藤学、安達功、渋谷克也、
 諸岡伸幸、中川信浩、平賀一浩
 印刷発送: グローバルシステム株式会社

平成10年会費納入のお願い

現在、平成10年度の会費の納入をお願いしております。未納の方には振込用紙を同封しておりますので、お振り込み下さい。

今後のさらなる築理会発展のためにご協力をお願いします。

年会費 5,000円
 口座名 築理会
 郵便振替 00110-5-171952
 銀行振込 三菱銀行神楽坂支店 普通 4335597

募集します!

会報委員会では、築理会報の各コーナーへの記事を募集しています。「こんな特集して!」「こんな宣伝がしたい!」「最近これおもしろいよ!」など、どんな些細な情報でも首を長くしてお待ちしております。また、建築にこだわらず、おいしい料理の作り方や、うまいラーメン屋情報、あなたの楽しい旅行記、その他の記事・情報、また、はみだしチェックにもどんどんお寄せください。

築理会あてFAXにてお知らせください。

データ確認カード返送のお願い

住所、職場、部署等に変更のございます方は、下記データ確認カードにご記入の上、築理会事務局までご返送下さいませ。様お願い致します。

最新データに基づいた名簿作成、編集のためご協力をお願い致します。

送付先: 建築学科事務室内・築理会事務局

名簿作成委員会

築理会員データ確認カード		記入日: 19 / /
ふりがな:		卒業年 年3月
名前: (旧姓)		(期 研)
		<input type="checkbox"/> 部 <input type="checkbox"/> 部
ふりがな/勤務先:		
ふりがな/部署・役職:		TEL
		FAX
電子mail:		
現住所: (〒)		
		TEL FAX
電子mail:		
現住所以外の安定的な連絡先、具体的な連絡方法及びTEL:		
所属学会 <input type="checkbox"/> 日本建築学会 <input type="checkbox"/>)		
<input type="checkbox"/>) <input type="checkbox"/>) <input type="checkbox"/>)		
通信欄		
築理会 現場見学会に参加します。		

お手数ですが拡大コピーをしてFAXにてお送りください。